



## 課題2-3 絵画から見たちばの風景

(次の1~4はテキスト38ページの1~4の解説である)

1 初代歌川広重(1797~1858年)は、江戸後期の浮世絵師で、房総を2度訪れている。歌川豊広に入門し、はじめは美人画や役者絵などを制作したが、後には名所、諸国風景などの風景画に優れた作品を残した。「六十余州名所図会」は1853(嘉永6)年~1856(安政3)年に制作された広重晩年の代表作で、全国68の国々の名所を描いた70図の揃物である。この《下総銚子の濱外浦》は、銚子の磯遊びの情景を描いている。江戸時代、銚子は成田山や香取神宮などととも、北総の行楽地として多くの人々が訪れた。銚子市南部の大若海岸には千騎ヶ岩と呼ばれる大きな岩がある。岩の名前の由来は、源義経が兄の頼朝に追われた時、この岩影に千騎を引き連れてこもったという伝説による。現在は橋で陸続きになっている。

2 「名所江戸百景」は、1856年~1858年に制作された初代広重最晩年の揃物である。江戸の市中と郊外の景観をテーマに、初代広重118枚、二代広重1枚と「目録」をあわせた計120図で構成されている。市川市国府台(鴻之台)は江戸川東岸の高台で、紅葉の名所として、また江戸や富士山の眺望ができる景勝地として知られていた。画面に描かれた富士山との位置関係から下流に向かって描いたことが分かる。1654(承応3)年、長い時間をかけた工事によって、利根川の流れを銚子方面に変えたため、関宿で分かれて江戸湾に注ぐこの川を江戸川と称するようになった。広重は「富士三十六景」や「不二三十六景」でも鴻之台を取り上げている。

3 葛飾北斎(1760~1849年)は、江戸後期の浮世絵師で、浮世絵以外にも挿絵や絵本など多方面に才能を発揮し、「北斎漫画」や「富嶽三十六景」

などがよく知られており、房総を2度訪れている。「千絵の海」は1830(天保元)年ころ制作され、各地の漁をテーマとした10枚の揃物である。この中には《下総登戸》以外に《総州銚子》、《総州利根川》があり、房総関係は3図が含まれる。江戸時代、登戸は佐倉藩の年貢積出港として栄え、この一帯の海岸は潮干狩りの名所として人気があった。また、埋め立てられる1965(昭和40)年ころまでは海水浴場としてもにぎわった。北斎は「富嶽三十六景」の中でも、この地を《登戸浦》として描いている。

4 浅井忠(1856~1907年)は、佐倉藩士の子として江戸に生まれた。幼少時は日本画に親しみ、工部美術学校で本格的な洋画を学び、その後、明治美術会を仲間と組織し、写実的な油彩や水彩の作品を発表した。東京美術学校教授を務めた後、パリに約2年間留学し、帰国後は京都に住み、京都高等工芸学校教授を務めた。《漁婦》は、1896(明治29)年末に南房総市白浜町根本海岸で取材した作品である。翌年帰京後に仕上げ、第8回明治美術展に出品した。この旅の帰り、浅井は、いすみ市大原で黒田清輝と偶然出会い、ともに写生した記録が残っている。この時、黒田は《大原海岸》という作品を描いた。

### 【参考文献】

「浮世絵に見る自然と暮らし」-房総地方を中心として-(展覧会図録)千葉県立上総博物館 2001年 / 「名品揃物浮世絵」ぎょうせい 1991年 / 「描かれた房総」(展覧会図録)千葉県立美術館 1975年 / 「浅井忠画集」京都新聞社 1986年 / 「房総の美術史・月報」千葉県立美術館 1993年

### 【参考】 著名な洋画家がちばを描いた作品 (例)

千葉市美浜区	ジョルジュ・ピゴー	《稲毛の夕焼け》	1892~95年	(千葉県立美術館蔵)
館山市布良	青木繁	《海の幸》	1904年	(石橋美術館蔵)
夷隅郡御宿	山本鼎	《御宿風景》	1905年	(山本鼎記念館蔵)
館山市布良	中村彝	《海辺の村》	1910年	(東京国立博物館蔵)
外房地域	大久保作次郎	《海水浴帰り》	1917年	(千葉県立美術館蔵)
勝浦市鶴原	安井曾太郎	《外房風景》	1931年	(大原美術館蔵)